

タイトル：イチゴらくちん栽培システムにおけるヤシ殻混合培地の活用

[要約]

イチゴの養液栽培（らくちん栽培システム）において、ピートバッグの培地に含まれるロックウールをヤシ殻に置き換えることで、水田への投入など使用後の処理が容易になり、収量も増加する。

香川県農業試験場 野菜担当

[連絡先] 087-889-1121

[部会名] 野菜・花き・茶（野菜）

[専門] 栽培

[対象] 果菜類

[分類] 指導

[背景・ねらい]

イチゴらくちん栽培システム（香川型イチゴ高設・バッグ式養液栽培）において、ピートモスとロックウールの混合培地が普及しているが、ロックウールの環境への影響が懸念される。そこで、ヤシ殻培地の本システムへの適応性を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. らくちん栽培システム用ピートバッグの培地として、ヤシ殻培地を単独で用いると、慣行のピートモスとロックウールの混合培地（3：1）やピートモス単用培地より、収量がやや劣る（[図1](#)）。
2. ヤシ殻をロックウールと同様にピートモスに混合すると、ピートモス単用培地より収量が増加する。混合比もロックウールと同程度でよい（[図2](#)）。
3. 慣行のピートモスとロックウールの混合培地と比べても、開花のそろいが優れ、収量が増加する。「ピートバッグ」の単価（試算）もやや安くなる（[図3](#)、[表1](#)）。

[成果の活用面・留意点]

1. ロックウールの使用をやめることにより、使用後の水田への投入などの処理が容易になる。
2. ヤシ殻培地は排水性の改善を目的とするため、やや粗めのチップ状のものを用いる。
3. 培養液は大塚A処方とし、コントローラによる日射比例制御による給液とする。
4. 品種は‘女峰’を用いた試験結果である。

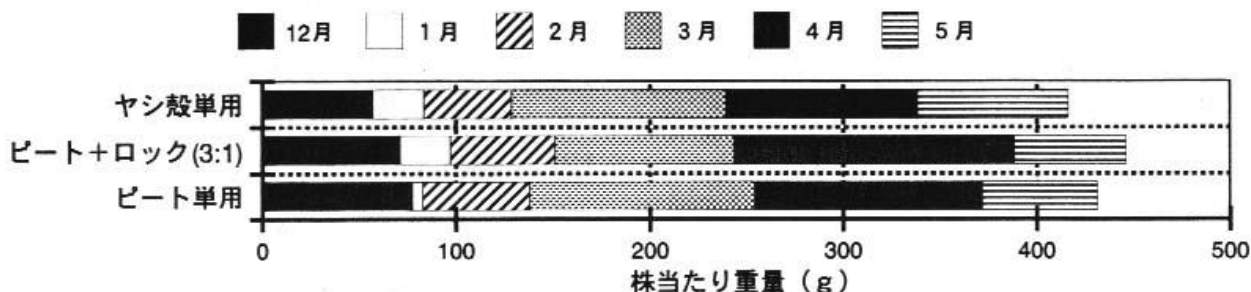


図1 ヤシ殻単用培地の収量性 (1997)

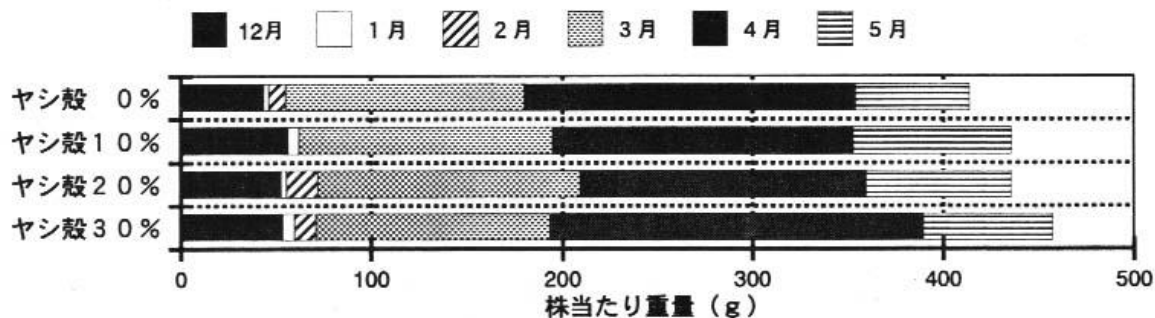


図2 ピートモスとヤシ殻培地との混合比が収量性に及ぼす影響 (1998)
注) ヤシ殻10%・・・ピートモス90%+ヤシ殻10%

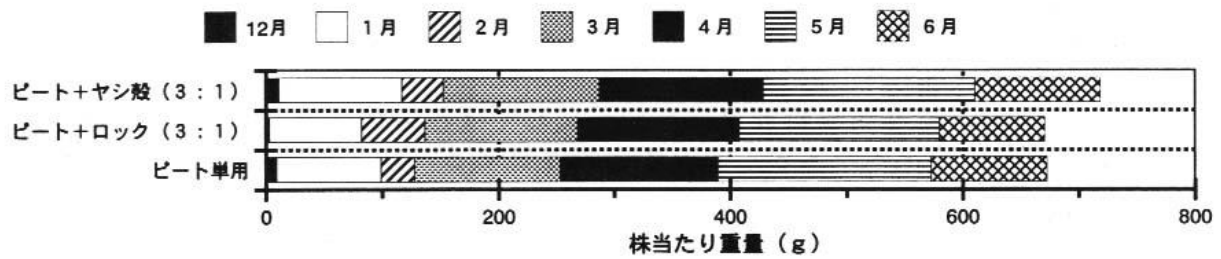


図3 ビートモスとヤシ殻との混合培地の収量性 (1999)

表1 ビートモスとヤシ殻の混合培地の開花調査結果
および「ビートバッグ」単価 (1999)

培地の種類	開花率	平均 開花日	ビートバッグ 単価 (試算)	
	11月24日		円	円
ビートモス+ヤシ殻(3:1)	77.1	11. 25	435	
ビートモス+ロック(3:1)	60.4	12. 1	455	
ビートモス単用	72.9	11. 29	435	

定植：9月24日

[その他]

研究課題名：促成イチゴの環境保全型養液栽培技術の確立

予算区分：国補（地域基幹）

研究期間：平成12年度（平成11～15年度）

研究担当者近藤弘志、伊藤博紀、牛田均、野田啓良、松崎朝浩

発表論文等：なし